

# 2021年度事業報告（案）

（2021年1月1日～12月31日）

法人名称 NPO 法人 教育支援グループ Ed.ベンチャー

## 1. 事業成果

コロナ禍によってよりはつきりした格差の広がりに対して、私たちは今まで以上に弱い立場の子どもたちに対して寄り添うことを、2021年度の事業方針として掲げた。

そのための具体的な活動の柱の一つは情報発信である。特に、力を入れたのは、教育講演会の連続開催である。例年、年度当初に1回だけ行う講演会を、2020年度末から2021年度始めの5回連続講座で行った。テーマは、教育の不平等・ICT・少人数学級・偏見や差別・ケアの倫理である。いずれも格差に抗う実践が提示されており、それが今すぐの実践に移すことはできないとしても、どのような将来や未来を描きつつ、今を過ごせばいいかが見えた企画であった。さらに、その後もEd.ベンだよりで「弱い立場」を取り上げ、それがどのような社会構造のもとにあるのかを分析して情報発信してきた。

もう一つの柱は、「弱い立場」の子どもたちの具体的な支援策を、学校現場の先生方を交えて共に考えるということである。こちらは、学校支援活動の各事業（理論学習会・授業研究会・スタディツアーや外国人の子ども理解・インクルーシブ）において、講演形式のものばかりではなく、対話型の学習会が全学習会の半分程度を占めるようになり、一定程度の成果があったと考えられる。ただし、残念ながら、それぞれの学習会での議論や共有された課題を、事業間で共有することができず、各事業を起点とした学びの大きなうねりを立ち上げることはできなかった。そこは次年度の課題である。

そして、最後の柱は、Ed.ベンチャーとしての活動の継続のための新たな動きへの着手であったが、こちらには全く手がつけられなかつた。それは、既に、Ed.ベンだよりで報告しているように、現事務局長の体調悪化と急逝により、残された事務局はその引継で精一杯であったことによる。いかに事務局長を中心とした動きでまとまっていたかを実感する。この点も次年度に引き継ぎ、取り組んでいくこととしたい。

最後に、あらためて2019-21年度の事務局長のご冥福をお祈りしたい。

事務局長の後任の理事として、村本綾氏を選出し、11月15日に理事に就任した。

## 2. 事業内容

### 学校支援事業 ①理論学習会

#### 【2021年事業目標】

教育現場の課題を捉え、いろいろな背景を持つ子どもや弱い立場に置かれる子どもが育ち学ぶ場としての学校について考え、実践につなげる。

#### 【事業総括】

昨年に引き続き、現場の教員たちが理論と実践を学ぶ場として学習会を設定した。昨年度の総括の中で、学校や学級は何を再生産していくのか、と記した。この1年、格差がもたらす現実は、コロナ禍というしわ寄せの中で、子どもたちの間で有利と不利を露骨にさらけ出すこととなった。このような環境のもと、貧困と教育をベースに子どもと学校を考える機会を継続できたことで、地域に生きる学校教育の意義や教員と子どもが出会う意味を見つめ直す機会となった。

柿本氏の講演では、教師は常に自己決定を求められる仕事であるということ、またその分岐点でどのような選択をするのかで、「子どもの言葉を聞かせてもらえる教師」かどうかが決まるというメッセージをいただいた。上手くいかない、社会的に弱い立場にいる子どもたちにとって、教師は受け入れてくれる存在なのか、それとも排除する存在なのか。子どもたちは問い合わせているし、教師は問い合わせられているという先生の言葉は、それぞれが教師として経験したこれまでの「分岐点」を振り返る機会となった。また、社会と個人をどのように捉え、うまくいかない子どもたちの現状や社会的・経済的格差を実態として感じ取れるかどうか、そのことを容認するかしないか、具体的対応をイメージできるかという問いかけは、教師という仕事やその存在の意味、そして、格差をなくすことはできなくても差を縮めることはできるのではないかという学校（教師）の役割についても考えさせられるものであった。経験を語り繋いでもらった講演から多くのことを学ぶとともに、柿本氏から教師への応援メッセージとしての意味をもつ講演会となった。

現職の若手教員の実践報告では、まさに分岐点に立ち、悩みながらも子どもと向き合ってきた言葉を聞かせてもらい、子どもを取り巻く社会的な背景や資源の問題、教員と子どもが出会う意味などを参加者で議論した。子ども自身が変えることのできない家庭環境や社会背景の中で、その子にどんな出会いが必要か、生きていく力とは何かを本人と一緒に模索することが重要だという意見や、学級や周囲の教員を巻き込みチームで支援にあたる中で、それぞれの立場に主体性が生まれていくこと、また、家庭で資源が少ない子ほど学校の役割が重要になってくるため、弱い立場に置かれる子をいかに資源につないでいくか、などの実践につながるたくさんの意見が出た。

座談会では、現場の教員以外にも、多様な立場からの参加があった。コロナ禍では、教育活動の制限や行事の実施状況など、地域によっての違いが生まれ、学校を分断させていた。各校での様子や取り組みを情報共有し、子どもの成長を願って各担任が教室で行う工夫や、行事の工夫をしていることが分かった。学校では教員も、「コロナだから仕方ない。」と無意識のうちに抑圧され、内面化させられている現状があるようだった。学習会を通して、様々な立場からの子どもを見つめる視点を得て、教員自身が知識を得ながら

も、実践を言葉にしていくことの重要性を感じた。

地域の他機関との連携を学ぶ講演会では、社会福祉協議会の実践を聞き、教育と福祉の垣根を超えた連携の可能性を模索した。参加者からは、「社会福祉協議会の活動について初めて知ることが多かった。」という声が多くあった。また、「子どもや家庭と近い距離で情報を把握している学校が社会福祉協議会と連携することで、当事者をより必要としている支援につなげられるのではないか」など、参加者が普段目の前にいる子どもや家庭をイメージしながら、支援へのつなげ方を具体的に考える感想が多く見られた。

開催方法として、オンラインで行うことで、会場に足を運ぶのが難しい市外・県外の方や育児中の方なども参加ができたため、今後も継続していきたい。

担当者	●活動代表（理事） 清水美希 馬場有希
内容・日時・場所・参加者数	<p>原則第一水曜日 19時～21時 全4回</p> <p>① 5月15日（土）13時～15時 教師として私たちが大事にすべきこと 講師 柿本 隆夫氏 場所 大和市シリウス＆オンライン（Zoom）同時開催 参加者 54名（会場21名、オンライン33名）</p> <p>② 6月2日（水）19時～21時 実践報告会～小学校・中学校の現場から～ 報告 大和市内小・中学校教員 場所 オンライン（Zoom）開催 参加者 21名</p> <p>③ 10月6日（水）19時～21時 報告・座談会 「『今』の学校、どうなっているの？」 報告 大和市内小・中学校教員 オンライン（Zoom）開催 参加者 11名</p> <p>④ 11月10日（水）19時～21時 講演 教育と福祉のはざまで～垣根を超えた連携を目指して～ 講師 村元 良悦氏（大和市社会福祉協議会） 場所 大和市シリウス＆オンライン（Zoom）同時開催 参加者 10名（会場8名、オンライン2名） (のべ参加者数 96名)</p>
収入金額	7,500円（参加費）
支出金額	3,300円（賃借料3,300円）

## 学校支援事業 ②授業研究会

### 【2021年事業目標】

子どもたちが学びを深めるための授業づくりは、どうすれば可能かを考える

### 【事業総括】

石井英真著『授業づくりの深め方』を第1回から第3回までは購読し、第4回から第8回までは、学習したことを活かすべく授業実践研究会を行った。

購読会では、かなり難しい内容だったので、清水睦美氏から助言を受けながらすすめた。

授業実践研究会は、レポーターをお願いするのがかなり難しかったので、助言をしてくださる石井先生にレポートをお送りするのが遅くなつて申し訳なかった。にもかかわらず、毎回質問に答えていただいたり、石井先生からの鋭いご指摘を受けたりすることができ、有意義な研究会になった。また、今回初めて参加してくださった先生方や大学生がいて、色々意見交換できたことは、大変良かった。

学校が、子どもたちにとって有意義な学び合いの場になるためには、教師が、出口の子どもたちの姿をイメージした上で入り口の目標を定めていくこと、子どもたちと学習と一緒に作っていくというスタンス、ICT活用のための授業ではなくあくまでも道具の一つであるということなどこれからの授業づくりに欠かせない視点をいただけた。

毎回予定時間をオーバーしてしまったが、石井先生には快くお付き合い頂けてありがたかった。今年度の研究は、まだ出発点でしかないのに、若い先生たちが、これからの授業づくりでさらに研究を深められたら良いと思う。

担当者	●活動代表（理事） 内藤順子 ○スタッフ 根岸佐織
内容・日時・場所・ 参加者数	<p>① 1月 26 日（火）文献購読会 『第1部 授業の本質とロマンの追求』 15人</p> <p>② 2月 26 日（金）文献講読会 『第2部 よい授業をデザインする5つのツボ』 9人</p> <p>③ 3月 24 日（水）文献講読会 『第3部 5つのツボを生かして授業づくりを深める』 8人</p> <p>④ 6月 15 日（火）授業研究会 林みなみ氏（大和市立小学校教諭） 社会科「大和市博士になろう」 24人</p> <p>⑤ 8月 4 日（水）授業研究会 幡野まどか氏（大田区立小学校教諭） 「良い授業」のデザインに向けた実践研究 国語「大きなかぶ」 13人</p> <p>⑥ 10月 4 日（月）授業研究会 松本翼氏（大和市立小学校教諭） オンラインを活用した授業 16人</p>

	<p>⑦ 12月13日（月）授業研究会          馬場貴司氏（大和市立小学校教諭）          授業の深め方 良い授業をデザインするための 5つのツボに基づいた実践研究          国語科「ごんぎつね」 19人          すべてオンライン（Zoom） 20:00～22:00          （のべ参加者数 104名）</p>
収入金額	30,000円（寄付金）
支出金額	67,372円（諸謝金 66,822円、雑費 550円）

### 学校支援事業 ③スタディツアー

#### 【2021年事業目標】

「虐待」に関わる事例研究会を通して、知識を学び、実際に虐待が疑われるケースに対応できる力を身につける。

#### 【事業総括】

2021年度は、新型コロナウィルスの感染状況を鑑みて、これまで行ってきた現地訪問は行わず、「虐待」に関わる全4回の事例研究会を開催した。コロナ禍において、虐待案件が増加傾向であることが報告されているが、本研究会でも、現在進行中の虐待が疑われる件が話題に上がるなど、子どもや家庭を巡る状況が逼迫していることを改めて実感させられた。

また、各回の研究会を通して、現場の教員が、自らに問い合わせながら、虐待に関して対応しているということが見えてきた。

- ・この子は虐待を受けているのではないか。
- ・「虐待の疑い」とは、どこで判断すればよいのか。
- ・通告したこと、あるいは通告しなかったことは果たして正しかったのか。
- ・子どもと保護者の関係は、今後どうなっていくのか。

といったものである。

そのような中で、学校が対応していく中で必要なことを2点挙げる。

1点目は、児童虐待や通告などに関する正確な知識を教員間で共有すること、そしてその上で虐待発見時の校内における体制や対応手順などを明確にしておくこと。

2点目は、虐待の当事者である子どもと親が一時保護や児相による指導が終われば、同じ家でまた生活を共にし、そこから学校に通ってくるということを認識して、対応に臨むことである。通告で終わりではなく、その後の親子の形に対して学校は何ができるのか。様々な関係機関が関わるようになっているからこそ、考えていかなければならないことである。

担当者	●活動代表（理事） 池田喬
-----	---------------

内容・日時・場所・ 参加者数	事例研究会 オンライン(Zoom)による開催 ① 第1回 6月19日(土) 14:30~16:00 6名 ② 第2回 8月28日(土) 15:00~16:30 4名 ③ 第3回 10月30日(土) 14:00~15:30 3名 ④ 第4回 12月18日(土) 14:00~15:30 2名 (のべ参加者数 15名)
収入金額	0円
支出金額	0円

## 学校支援事業 ④産休・育休・働くママパパのための学習会

### 【2021年事業目標】

Ed.ベンチャーの活動に育児中の方も参加できるような学習会の工夫や、情報の発信方法などを考え、報告会等で提案する。

### 【事業総括】

今年度は、担当者が育児中のため、家族の突発的な事情等により報告会に参加できないことが多く、育児中の立場から提案や問題提起することができなかった。直接参加ができないくとも、声を届ける工夫が必要だった。

本事業の活動としては、1月の報告会で“育児中の方へのアンケート結果”を提示したことのみとなる。アンケート結果を踏まえて、育児中の方は学習への意欲が高いにも関わらず学習会への参加が難しい現状にあるということや学習に充てることができる具体的な時間帯がいつなのかといったことを各事業へ提案し、問題提起することができた。このことは、各学習会の担当者が今年度の事業計画を立てる上で、育児中の方に意識を向けるきっかけになったように感じる。そのためか、子どもを預けやすい土曜日の開催や、寝かしつけが終わる時間帯の開催を取り入れる学習会も多かった。担当者からは、育児中の方を意識した声掛けが見られ、途中参加や突発的に抜けなければいけない状況になることを理由に参加を躊躇してしまう方が前向きに学習会に参加するきっかけになったようだ。

今年度はコロナの影響により、オンラインでの学習会が開催されるようになるなど、大きな変化があった。オンラインでの学習会は、子どもを見ながらの参加や、夜中に移動しなくてもよいという利点があり、育児中の方が参加しやすくなる大きな要因となった。

本事業は2016年度、育児中の方も安心して参加できる学習の場を提供することを目標に発足し、育児に視点をあてた学習の場づくりの工夫を凝らしてきた。しかし、先ほど挙げたように、オンラインの普及による学習会の形の変化、各事業の学習会開催の工夫により、現在育児中の方の学習の場は確保されていると言えよう。以上を踏まえて、本事業は次年度より、一旦活動を休止する。

今後、対面での学習会が再開される等、状況の変化により育児中の方の学習の場の確保が難しくなるようなことがあれば、本事業を再開したいと考えている。

担当者	●活動代表（理事）下新原なつみ ○スタッフ 清水美希
内容・日時・場所・参加者数	1月7日 報告会 「コロナ禍においての子育て中の方の現状報告と提案」：担当者
収入金額	0円
支出金額	0円

## 学校支援事業 ⑤外国人の子ども理解のための学習会

### 【2021年事業目標】

外国人の子どもの現状や課題を理解する場、外国人の子どもに関する専門的な知識を学ぶ場を企画運営する。

### 【事業総括】

#### 〈学習会〉

4月は例年「外国人の子どもたちの生きづらさ」を扱っていたが、参加者から「子どもたちの背景を知ることの大切さはわかったが、実際にどのような場面で困っているのかもっと具体的な事例を知りたい。」と言った声もあった。そこで、言語や親子間、経済面、同調圧力、代弁者の有無など、困り感がどう起こるかを想定した学習会となった。

グループディスカッションの中では、少人数学級やTTの活用が呼ばれる中でなぜ国際教室のような「取り出し」が必要なのか話題となった。日本の現状としては教室内での競争や同化圧力が言語を獲得することや子どもたち自身が発言することを難しくしてしまうことがまだデメリットになってしまいから、そう考えると国際教室に取り出して、言語の獲得や子どもたちの声を聞いて代弁する時間を作ることは現状として有効な手立てだと再認識した。

8月は「子どもたちがルーツを知る意味」を扱った。外国にルーツを持つ子どもたちが自分のルーツを知ることによってその後の生き方、葛藤との向き合い方にどのような変化をもたらすのかについて考える学習会となった。特に下福田中学校で行われた選択教科「国際」の講師陣とその授業を受けた卒業生、それぞれの立場から話をいただいた。

まず、清水氏からは日本の学校の現状を踏まえながらも、時間をかけて葛藤やルーツと向き合うことが資源になることが大切だという話をいただいた。日本の学校は、学力重視で効率よく物事が進むことがよいという傾向があり、葛藤やトラブルについて取り上げることは避けられやすいという現状から、生徒たちは「抱える葛藤を自分の問題とする傾向があり、ルーツについて否定的な認識を持つ」ようになっていくという現状にある。選択国際の実践のように葛藤やルーツに時間をかけて取り組むことで「葛藤が資源」になり、日本や出身国どちらにも状況に応じて選択的なアイデンティティの実践が行えるようになる状態になるから、時間はかかるけれども子どもの意見表明の聞き手の存在が葛藤と向き合う、自己肯定感を高めるために重要だということがわかった。

ナリット氏からは、「自分嫌い」から自身の葛藤やルーツと向き合い、その葛藤やルーツをどう資源にしてすたんどばいみーで活動してきたのかという話をいただいた。ナリット氏は小学校のときの国際教室での取り組みから、特別扱いされることと母国語ができないことで外国人である自分が嫌になった経験があった。中学校では選択教科「国際」として強制的に参加を強いられ、最初は抵抗があったものの、母国の歴史を学び、「なぜ日本にいるのか」親への聞き取りを通して自分のルーツを知るきっかけとなった。それと同時にすたんどばいみーで活動する先輩との出会いもあり、外国人として生きる「モデル」をそばで感じ、やがては全校生徒の前で自分の葛藤やルーツについて語るスピーチをして外国人としての自分をスタートするきっかけを作っていった。

スタッフとしてすたんどばいみーで活動する中で様々な後輩と出会い、「外国人当事者」としてルーツや葛藤と向き合っていき、それが外国人のための居場所づくりにつながっていき、社会人となった現在でも、国際結婚や相手親族へのルーツの語り、帰化申請など自身の新たな葛藤に向き合うこともあり、それらを整理して言葉にしていくことの大切さを学んだ。

オンラインと対面とのハイブリッドでの開催となつたが、会場参加者の声をディスカッションの中で拾ってオンライン参加者に伝えることに運営上の難しさがあった。今後もこのような機会があるので、お互いが活発にやりとりできるような方法を模索したい。

#### 〈事例研究会〉

外国にルーツを持つ子どもたちの具体的な事例を通して、彼らの背景にある事情や問題を読み解く力をつけていこうという目的で9回開催した。学校で外国にルーツを持つ子どもたちを担当している先生方のほかに、小学校でフィールドワークを行っている大学院生や地域で学習支援をしているボランティアの方など、様々な立場で子どもたちに関わっている方からの事例提供や報告があった。協議では、様々な見方や実践、情報を出し合うことができ、次への実践へつながる内容となつた。アドバイザーの大学教授からは、外国にルーツを持つ子どもたちの研究をもとにした外国人理解に関する知識を得ることができた。日本語指導者や大学生、大学院生、地域ボランティアなど様々な立場の方の参加があり、参加者の幅には広がりがみられたが、小中学校の先生方の参加は少なかつた。小中学校の先生方の参加が増えるような工夫をしていく必要がある。

担当者	<p>●活動代表（理事）西岡歩        ○スタッフ 篠原弘美 神戸芳子</p>
内容・日時・場所・ 参加者数	<p>〈学習会〉</p> <p>① 4月21日（水）19:30～21:30 オンライン（Zoom）        外国人の子どもたちの困り感        講師：清水睦美氏（日本女子大学教授）        参加人数：24人</p> <p>② 8月5日（木）14:00～16:00        子どもたちがルーツを知る意味        講師：清水睦美氏（日本女子大学教授）        チャン・ソワンナリット氏（NPO法人外国人支援ネ</p>

	<p>ツトワークすたんどぱいみー)</p> <p>場所：大和市シリウス 612 オンライン（Zoom）同時開催</p> <p>参加人数：会場 8 人、オンライン 7 人、計 15 人</p> <p>（事例研究会）</p> <p>水曜開催 19:00～21:00 オンライン（Zoom）開催 1/27 5/26 7/28 10/27</p> <p>土曜開催 13:30～15:30 オンライン（Zoom）開催 2/13 3/27 6/26 9/25 11/27</p> <p>（のべ参加者数 学習会 39 名 事例研究会 93 名）</p>
収入金額	2,500 円（参加費）
支出金額	36,711 円（賃借料 3,300 円、諸謝金 33,411 円）

## 学校支援事業 ⑥インクルーシブな社会を目指す学習会

### 【2021年事業目標】

学校現場でのインクルーシブな教育の実現の可能性を探る。

### 【事業総括】

今年度は事業目標の実現を目指し、2つの柱を立てて学習会を行った。第1には、インクルーシブに向かう営みとして、子どもたちのおかれた苦しさを理解することである。第2には、インクルーシブに向かう営みとして、学校や教室において子どもたちの多様性を認め受け止める環境づくりの可能性を探ることである。具体的には以下のとおりである。

#### ① 子どもたちの抱える苦しさを理解すること

9月の学習会では、児童養護施設職員の山口氏を講師に招き、児童養護施設に通う子どもにスポットを当てた。「年齢によって退所しなくてはいけない。」という、施設の子どもたちが直面する特有の苦しさを学ぶことができた。施設の子どもたちは、基本的な生活習慣が身についていないケースや、障がいの診断がある子どもたちも多く、進路選択・決定における社会的な自立実現への切実さは、親族と近い環境で生活する子どもたちよりも強いものであることが理解できた。参加者の中には、児童養護施設から学校に通う子どもたちと日々接している教職員もあり、児童養護施設の様子を職員から聞くことができたことは、子どもたちをより深く理解することにつながった。

12月には、教室における「権力」作用を学ぶことで、子どもたちのおかれた状況を学ぶことができた。権力とは従属との循環によって成り立つこと。そして、従属する服従者は従属していることで利益を得ることもあり、権力の維持は権力者の一方的な“力”によって成り立つものではないことを学ぶことができた。また、“権力者”と“服従者”的関係性は、そのまま学校における“教師”と“生徒”的関係と一致しており、改めて教師が権力を持っているという自覚が大切であると痛感することとなった。

② 学校や教室でのインクルーシブな環境づくりについて

3月の学習会では、学校現場で差別・排除の生まれる瞬間を様々なケースごとに整理し、障がい児(障がいの特性)に対しての「処方箋的知識」の獲得の大切さを知ることができた。子ども同士の関わりを増やし、障がい児の行動を肯定的に捉えなおす教師の言動・働きかけが重要であると学ぶことができた。

6・9月の学習会では、オランダのイエナプラン教育の実践を見て、多様性の確保のヒント、インクルーシブな教室環境づくりについて考えた。異年齢集団を基本とし、誰かが何かを知らないのは当たり前。当然のように多様性が生活のベースとなっている教室で過ごす子どもたちの笑顔が印象に残った。教室のレイアウトや一人ひとりにあった課題の提示、現実社会で起きている問題を組み込んだ教材づくりの発想など、日本の学校でも実践できるのではないか、とヒントを得ることができた。また、イエナプランの出発点である「学校は知識を学ぶ場だけではなく、社会に出るための準備の場」という考え方で、改めて、学校の課題を見直すことが社会を見直すことと乖離してはいけないと教えてくれた。

11月は、校則をなくしても学校が成り立つという実践を知ることで、インクルーシブな学校づくりの可能性を探ることを目指して読書会を開催した。世田谷区立桜丘中学校は校則のない公立の中学校である。「その校則が本当に必要なのか」という疑問を出発点に教員同士が議論を重ね、生徒の発案がきまりの変更や校則の廃止につながっていった。学校・教室には「こうあるべき」「こうしなくてはいけない」という、根拠のはっきりしないきまりが存在していることを自覚し、一人ひとりの子どもに目を向け、子どもたちが求める声に耳を傾けるという姿勢がその根底にあった。多様性を認めるインクルーシブな学校づくりに必要不可欠な視点を学ぶことができた。

担当者	<p>●活動代表（理事）森尾宙  <input type="radio"/>スタッフ 清水睦美</p>
内容・日時・場所・ 参加者数	<p>① 3月 27日(土) 15:30～17:30            講師：横山青空氏(日本女子大学卒業生)            内容：卒業論文『小学校現場で障がい児が被る差別・偏見の姿』の報告と意見交換            オンライン（Zoom） 参加者 14名</p> <p>② 5月 12日(水) 19:00～21:00            内容：多様性を学級に組み込む方法－イエナプランに学ぶ            オンライン（Zoom） 参加者 13名</p> <p>③ 6月 9日(水) 19:00～21:00            内容：多様性を組み込む学級づくり－ビデオ視聴から考えたこと            オンライン（Zoom） 参加者 7名</p> <p>④ 9月 10日(金) 19:00～21:00            講師：山口貴子氏(児童養護施設職員)            内容：児童養護施設と子どもたち</p>

	<p style="text-align: center;">オンライン（Zoom） 参加者 10名</p> <p>⑤ 11月17日(水) 19:00～21:00 読書会：西郷孝彦著『校則なくした中学校 たったひとつの校長ルール』</p> <p style="text-align: center;">オンライン（Zoom） 参加者 3名</p> <p>⑥ 12月4日(土) 13:30～15:30 内容：教室における「権力」をつかむ 講師：清水睦美氏(日本女子大学教授)</p> <p style="text-align: center;">オンライン（Zoom） 参加者 5名 (のべ参加者数 52名)</p>
収入金額	0円
支出金額	0円

## 外国人支援事業

### ⑦子どもの居場所・学習支援教室（エステレージャ☆ハッピー教室）

#### 【2021年事業目標】

外国にルーツのある子どもの学習支援を行う。学習だけではなく、家庭や学校の話を丁寧に聞いて可能な範囲で支援をし、解決を図る。また、小中学生が共に体験したり学んだり話し合ったりすることを通して、異年齢の仲間と協力し、お互いの考えを知り自分の考えを深められるような集団で学ぶ時間を定期的に設ける。

#### 〈小学生教室〉

教科学習支援として、宿題の他、国語・算数を中心に学年ごとの習得すべき内容の教材を用意して学習の支援を行う。学習内容の理解を深めていくよう、丁寧な説明を加えながら学習を進めていく。

#### 〈中学生教室〉

中学生に対しても、丁寧な説明を加えながら学習を進め、学習内容の理解を深めていく。普段の学習支援の他、定期テストや高校受験支援も行う。定期テスト前にはテスト対策の学習会を、中3生には受験対策学習会を準備する。また、2、3年生には進路学習会を実施し、先輩の経験から進路について学ぶ機会を持ち、早くから将来についての計画を持てるような時間を作る。

#### 〈母語教室〉

子どもたちの母語の維持、獲得のために、母語話者スタッフによる母語教室を定期的に開催する。学習計画は母語話者スタッフとともに関係スタッフが一緒に考えていく。必要に応じてスペイン語以外の言語も検討をしていく。

**【事業総括】**

登録制を継続して、小中学生への学習支援を行った。

コロナ下での非常事態宣言が出された期間中は、林間小学校を利用することができなかつたため、開催会場を市内学習センターに変更して活動を行った。週ごとに会場が変わったこともあり、子どもの参加が少ない時が多くあった。今後、参加を促す工夫をしていく必要がある。

**〈小学生教室〉**

宿題の支援が主であったが、必要に応じて算数の教材を用意して学習支援を行った。学習支援の中で、子どもたちの話を丁寧に聞くようにした。大和市シリウスを会場としたときには、図書館で本に親しんだり展示作品を見学したりして、様々なものに触れる機会を作ることができた。

**〈中学生教室〉**

学校や進路の話を丁寧に聞きながら学習支援を行った。持参した課題にまじめに取り組んではいても、教科学習に使われている日本語を理解できていないために学習内容を十分に理解できていない様子が見られたので、わかりやすい日本語で丁寧に説明しながら支援を行った。学校の課題のほかに、国語の読解や数学の基礎的な計算の問題集を用意して苦手な学習分野が復習できるようにした。中3生には、スタッフが進路について説明をしたり、高校生・大学生スタッフが体験談を話したり進路の相談に乗ったりして、進路に向けて意識を高める活動をした。冬休みに中3生対象の受験対策学習会を開催する予定だったが、当該生徒の都合により形式を変更し、12月から週1回平日の夕方定期的に受験対策の学習会を開催することとした。受験勉強や面接練習に取り組む中で、受験に向かう姿勢を作ることができた。

**〈母語教室〉**

母語話者のスタッフが社会人となり、スタッフとしての活動ができなくなつたため、スペイン語の母語教室は開催できなかつた。子どもたちの母語維持のために、母語教室を継続していく方法を模索する必要がある。

**〈その他〉**

- ・教室後半の支援の仕方について、学習を広げる時間にするのか遊びの時間にしてもよいのかという迷いがあった。コロナ禍の学校生活で様々な制約を受けている子どもたちの状況を考慮し、人とかかわる時間を作り子どもたちの居場所となることもエステレージャの活動方針の一つであることから、後半はスタッフと子どもが一緒に遊ぶ時間を増やし、子どもたちのストレス解消の時間とした。遊びを通して、子どもたちが関係を作ることにもつながつた。

- ・日本語の語彙を増やすために紙芝居や辞書の使い方の学習を集団学習で行ったが、子どもが少なかつたり宿題が終わらない子どもが参加できなかつたりということがあり、集団学習を計画通りに進められなかつた。子どもの参加を促す、スタッフの打ち合わせを十分に行うなど、意義のある集団学習を進めていくよう工夫する必要があつた。

- ・子どもへの支援では、部活動で教室に参加できないことが多い中学生がいたが、電話で学校や学習状況を把握したり必要に応じて保護者に日本語支援を行つたりして、関係づくりに努めた。

<p>・保護者への支援では、学校からの手紙や役所関係の書類などの相談を受け対応したり、保護者が病気になった家庭への支援を行ったり、教室への送り迎えができない家庭への支援をしたりと、様々な支援の必要があり対応をした。</p> <p>・必要に応じて、教室に参加できない子どもに対して数回オンライン（Zoom）での支援を試みた。子どもとのつながりを維持するには有効な手段であったが、オンラインでの支援の難しい面も知る機会となった。</p>	
担当者	<p>●活動代表（理事）篠原弘美 馬場貴司 福島聖子        ○スタッフ 角替弘規 保坂克洋 高島奈美恵 清島光 根岸佐織        井上哲夫 横矢玄 中川恵理 ジェマイマ・ルース・アゴコプラ 笠愛莉 佐藤ひより 多湖シゲミ        相模女子大学ボランティアサークル「ミント」</p>
内容・日時・場所・ 参加者数	<p>毎週土曜日 10:30~12:30        1/9 16 23 30 2/6 13 20 27 3/6 13 20 27 4/3 10 17 24 5/8 15        22 29 6/5 12 19 26 7/3 10 17 24 31 8/7 21 28 9/4 11 18 25        10/29 16 23 11/6 13 20 27 12/4 11 18 25        定期テスト対策学習会 9/24 16:00~18:00        中3受験対策学習会 12/14 16:30~18:00        場所：大和市林間小学校 図工室        大和市シリウス 606 607 609        大和市ベテルギウス 会議室2 部室        (のべ参加者数 小学生154名 中学生52名 合計206名)</p>
収入金額	257,4000円（県中央労福協共済金 250,000円、登録料 7,400円）
支出金額	266,119円（給与手当 119,086円、保険料 6,032円、賃借料 82,575円、諸謝金 40,090円、印刷製本費 1,860円、消耗品費 11,036円、旅費交通費 5,440円）

## 子ども支援事業 ⑧愛川学習支援 Friends☆Star 教室

### 【2021年事業目標】

ボランティアコーディネーターを育成する。

定期開催に向けてスタッフを確保する。

### 【事業総括】

母語教室はオンラインによる定期開催をすることができた。Friends☆Star 教室に通っていた不適応が心配されていた子ども達もそれぞれに高校進学を果たし、教室の役割はほぼ完了したと考えられる。コーディネーターも、子どもたちのケアを終えたことで、教室に一区切りをつけたいという意向があり、本年度で事業終了をしたい。

### 担当者

●活動代表（理事）清水睦美  
 ○スタッフ 角替弘規 清島光 武内敏子

内容・日時・場所 参加者数	1/6・1/13・1/20・2/3・2/17・3/3・3/24・4/7・4/21・5/12・5/26・ 7/7・7/28・9/1・9/15・11/10・12/15 (のべ参加者数 54名)
収入金額	0円
支出金額	38,978円（諸謝金 38,978円）

## 学校・外国人・子ども支援に関する普及啓発事業

### ⑨教育相談

<p><b>【2021年事業目標】</b>            相談事業を通して、ニーズの把握と必要な事業の展開の仕方を検討する。</p>	
<p><b>【事業総括】</b></p> <p>学校・教師・行政・子ども・保護者・外国人当事者・支援団体等の各種相談に応じることを目的としているが、コロナ禍によるソーシャルディスタンスの影響に加えスタッフの体調不良等により、前年度からの継続相談をかろうじて行うだけにとどまった。コロナ禍により相談等が増えるかもしれないという予想に反して、新規相談はなかった。このことからも、必要なところに必要な支援が届いているかどうかという観点での検証が必要であると感じた。</p>	
担当者	<ul style="list-style-type: none"> <li>●活動代表（理事）松永雅文</li> <li>○スタッフ 清水睦美 神戸芳子 篠原弘美 林幹也</li> </ul>
内容・日時・場所・ 参加者数	<ul style="list-style-type: none"> <li>①（2019年より継続）「すたんどばいみー基金」から移管された相談。該当者はS・E・R・Hの4名。コロナ禍により月1回の面談を中止し、年末にまとめて行った。<u>計4回</u></li> <li>②（2019年より継続）「保証人事業」より移管された当事者相談事業。2回の報告会（3月1日、9月21日）を実施し終了。<u>計2回</u></li> <li>③多言語若手通訳派遣事業           <ul style="list-style-type: none"> <li>a 通訳登録6名（カンボジア語2名、タガログ語2名、スペイン語2名）</li> <li>b 外部派遣は依頼がなく行わなかった。</li> <li>c 通訳プラッショアップのための母語教室（ベトナム語） 3回実施（1/10、1/24、2/14）</li> </ul> </li> <li>④（2019年より継続）外国籍中学生と母の支援については、生徒の高校進学が決定し、2021年3月終了。</li> <li>⑤（2020年より継続）H中学校より母国語による学習支援補助は継続依頼がなく、2021年3月で終了。</li> <li>⑥新規相談なし。</li> </ul>

収入金額	0円
支出金額	65,123円（諸謝金 53,453円、印刷製本費 630円、通信運搬費 5,040円、消耗品費 6,000円）

## 学校・外国人・子ども支援に関する普及啓発事業

### ⑩普及啓発活動

#### 【2021年事業目標】

社会に対して当法人の活動を紹介しながらその位置づけを明確にし、社会的に弱い立場にある人々に対する支援の重要性を普及・啓発していくこと。

#### 【事業総括】

2020年度に引き続き当法人の活動の紹介と社会的に弱い立場にある人たちへの支援の必要性と重要性を普及・啓発するために以下の活動を行った。

①コロナ禍を受けて 2020年度に企画された連続講演会（全5回）のうち、2021年度分として2回の講演会を開催した。

#### 第4回座談会

偏見・差別・自粛警察を考える、話題提供：山口毅氏（帝京大学准教授）

#### 第5回講演会

コロナ禍で考える未来の社会と教育、講師：岡野八代氏（同志社大学教授）

2022年教育講演会について、講演会のテーマは実行委員による協議に基づき決定した。コロナ禍における社会状況をふまえ、児童虐待を切り口にその背景について考えることとし、準備を進めている。予定しているテーマと講師は以下のとおりである。

#### 児童虐待から家族・貧困・社会を考える —コロナ禍で置かれた女性の位置—

講師：周燕飛氏（日本女子大学教授）

②広報誌「Ed.ベンだより」はNo.41～47の計7号を発行した。年初に教育講演会の連続講座を開催したことを受け、例年より1号多い発行となった。

③ホームページは各事業内容の進行に合わせ随時告知と報告を更新した他、連続講座の開催に当たっては専用バナーの設置等を行った。本年度のホームページへのアクセス数は6367件で前年比2411件の増加となった。

④2021年度版パンフレット（三つ折版）を作成・配布した。さらに、ホームページのトップページ上にパンフレットをダウンロードする専用バナーも開設した。

⑤法人設立15周年記念事業として、これまでの教育講演会をまとめた記念冊子を作成するための準備を進めている。

⑥資料・書籍の管理販売として、部室にて書籍を販売した。

⑦他機関・他団体との関係構築として、12月にヒアリングの申し出が1件あり対応した。

⑧研究者対応を含む渉外として、大学生より調査実施の申し入れが3件あり、対応した。

⑨会員に対してはメール配信と郵送による情報提供を継続している。広報誌の送付や事

業に関する情報提供を迅速にできるよう努めた。

担当者	●活動代表（理事）角替弘規 ○スタッフ 池田喬 清水睦美 前田拓郎
内容・日時・場所・参加者数	<p>①【2020-21 教育講演会連続講座】            第4回座談会：1月23日（土）14:00～16:30            場所：オンライン（Zoom） 参加者 15名</p> <p>第5回講演会：2月6日（土）14:00～16:30            場所：オンライン（Zoom） 参加者 21名</p> <p>2022年教育講演会用チラシ発送準備 3000部（発送は2022年度予算）</p> <p>②大和市を中心に関係団体に配布（2000部／回）</p> <p>③随時（担当者打合せを月1回開催）</p> <p>④2021年度パンフレット配布 4月配布（2500部）</p> <p>⑤原稿集約中</p> <p>⑥売上合計 0円</p> <p>⑦1件（なお、ヒアリングは1月14日に実施予定）</p> <p>⑧3件：9月22日、10月6日、11月22日</p>
収入金額	0円
支出金額	254,359円（諸謝金 33,411円、印刷製本費 59,550円、通信運搬費 104,652円、消耗品費 40,136円、業務委託費 15,400円、雑費 1,210円）

## ⑪法人の事業円滑実施のための活動

### 【事業総括】

- ①・総会：2021年2月23日（火）14:10～15:30開催
  - ・活動報告会を年12回開催し、報告・審議を行った。コロナ感染拡大により、2回以降はオンラインで実施した。
  - ・事務局会議を年9回開催し、事務局運営・事務所管理を行った。場合に応じてオンラインで実施した。
  - ・年間計画を作成し、活動の全体予定を把握した。
- ②・会計については、月1回の会計処理を行った。
  - ・年2回の会計締切日を設定し、予算の執行状況を確認した。
- ③ 東日本大震災・反原発関連活動は、コロナ禍でもあり、特に目立った活動はなかった。
- ④ 四国地方の大学生より、国際教室担当と日本語指導員の資格について等の問い合わせがあり、対応をした。

担当者	<p>●活動代表（理事）神戸芳子 武内敏子        ○スタッフ 清水睦美 篠原弘美 内藤順子        （会計） 篠原弘美 清水睦美 神戸芳子 小西永里子        （震災関連） 清水睦美</p>
内容・日時・場所・参加者数	<p>① 総会 2021年2月23日（火）14：30～15：30        大和市ポラリス会議室7、オンライン（Zoom）        参加者 65名（正会員 74名）        活動報告会：13回（原則奇数月）オンライン（Zoom）        理事 15名        事務局会議：月1回 当法人事務所、オンライン（Zoom）        ② 会計処理：月1回 当法人事務所、部室        会計確認（締め）：年2回（6月、10月）当法人事務所        会計監査：年1回（2月11日）当法人事務所        ③ 活動なし        ④ 9月20日 10月3日 11月11日当法人事務所 電話</p>
収入金額	740,355円（会費 573,000円、寄付 130,000円、雑収入 37,355円）
支出金額	321,523円（通信運搬費 119,547円、消耗品費 607円、ガス水道光熱費 37,939円、賃借料 2,150円、租税公課 17,700円、保険料 3,570円、諸会費 5,000円、修繕費 19,250円、雑費 115,760円）